

氏名	まつもと けんたろう 松本健太郎
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人博第291号
学位授与の日付	平成17年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目	記号論とメディア論の架橋を目指して 「言語」と「装置」の媒介作用・延長作用に関する一考察
論文調査委員	(主査) 教授 松島 征 教授 高橋由典 教授 篠原資明 助教授 加藤幹郎

### 論文内容の要旨

本申請論文の目的は、記号論とメディア論の言説比較を行ない、人間と文化的環境とを仲立ちするメディアの働きを包括的に考察することにある。なお、このプロジェクトを遂行するにあたって、本稿では二つの鍵(キー)概念を設定した。その第一のものは「媒介作用」mediationである。これまで数多くの理論家によって多種多様なメディア観が提起されてきた。なかには一般的な認識からして「メディア」と呼ぶには相応しくないようなものが含まれることすらある——メディアとは、ときに組織体であったり、紙切れであったり、愛であったり、自動車であったりするのだ。つまり対象ベースで概観する限り、「メディア」という語の指示対象には一貫性が認められない。そのようなわけで、乱立するメディア観を統一的な視点から俯瞰するためにも、本論文ではあらゆるメディアに認められる「媒介作用」という観点から考察を進めた。

第二の鍵概念となるのは「延長作用」extensionである。もはやメディア論ではクリシェになっている感があるが、メディアの「延長作用」に着目した理論的なディスコースは数限りなく存在している。たとえば写真機を例にとった場合、それは肉眼を代補する機械の眼としても機能しうるだろうし、また、遠隔地の時空を鑑賞者の「今ここ」へと映像的に現前させる補助器具としても機能しうるだろう。このとき写真機は人間の身体的な能力や可能性を延長し、かつ、その時空意識までも拡張する装置として作用することになる。重要なことは、「延長作用」がメディア論のみならず記号論でもしばしば論及の対象となっている、ということである。つまり、この「延長作用」という視点は、本稿で遂行される言説分析に新たな視角を加えるものとして重要なのである。

本論文では、「媒介作用」および「延長作用」という視点に依拠しながら、これらの問題が記号論とメディア論においてどのように扱われてきたのかを明らかにしようと試みた。そして分析の結果、両ディシプリンにおけるアプローチの相違が明らかにされた。仮にメディアを「記号の乗り物」と定義するならば、それは記号論とメディア論、それぞれの研究対象は何か、を示唆している。しかしながら、これまでの記号論およびメディア論におけるディスコースを通観するならば、それぞれの分野で、記号と、その“乗り物”たるメディアとの関係性が十全な考察の対象になってきたとは言い難いのではないだろうか。理論構成という側面から言えば、おおむね記号論では言語中心主義的な観点から、またメディア論では技術決定論的な観点から、人間や文化の組成が議論の俎上に載せられてきた(むろん記号論とメディア論の理論的な異同は、これだけには止まらない)。その反面、いずれのディシプリンでも、言語コードとテクノコードとの相互関係性を視野に入れた議論は乏しかったのではないだろうか。このような着想をもとにして、私の博士論文では、記号論とメディア論のそれぞれに内在する理論的バイアスを超克するかたちで、身体/言語/装置といった編制によって、ポスト印刷時代における主体モデルを再考しようと試みた。

なお、当該論文は全部で四つの章から構成される。まず第1章では複数のメディア論者の所説を取り上げながら、メディア装置の「媒介作用」および「延長作用」の諸相を考察した。とりわけ、新しいメディアが次々に踵を接して発明されるといふ史のプロセスに関連して、彼らの多くがその通史的な次元に配慮していること、また、各時代における覇権的なメデイ

アの影響力を重視していることに留意した。

つづく第2章ではロラン・バルトと丸山圭三郎のディスコースを主要な題材としながら、文化記号学という枠組みのなかで媒介作用・延長作用の問題を考察した。ここでは、とくに人間を人間たらしめ、また文化を構築するための基本的な条件であり、しかも人間と世界との関係を規定する要因でもある「言語（記号）」の働きについて論じた。

本稿では、媒介作用／延長作用のメカニズムが、記号論においては「言語」中心の視点から考察されていること、メディア論においては「(メディア)装置」中心の視点から考察されることが前提となっている。第3章では、その視点のもとで、先行する第1章および第2章での成果を統合的に分析し、記号論とメディア論の言説分析を完遂させる場を提供すべく試みた。

第4章では、そのような作業を経た上で、写真メディアの装置的な媒介作用を「言語」のそれと対置しながら論述した。とくに19世紀に史上初の「テクノ画像」として生まれた写真、何らかの装置によって制作された画像として誕生した写真のメディアとしての歴史的意義および理論的位置を探りながら、新たにもたらされた写真の視覚性がいかなるものであったのかを論じた。そこでは、ロラン・バルトが晩年に『明るい部屋』（1980）で実践した私的探求が、特別な重要性を帯びたものとして扱われる。この書物は、記号論者を自認していたバルトが、自らの思想的遍歴の果てに、記号論との離別を語ろうとするものであり、他方で、記号論というよりもむしろメディウム論として読みうるものだからでもある。さらに、写真メディアの装置性に仮託して「言語圏からの離脱」を企図するものでもあった。つまり、このテキストは、ともに媒介作用をもつ「言語」と「装置」とを対極的に捉える本稿の意図に合致しているのである。以上が本論文の梗概である。

#### 論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、記号論とメディア論という二つの学問領域に橋を架けようとする、きわめて斬新で意欲的な試みである。これまでは、二つのディシプリンにおいて同じような問題が扱われながら、それぞれの分野でのアプローチの違いのために、結果的には異質な人間観・文化観が生みだされてきた。前者では主に「言語」という観点から媒介作用・延長作用の問題が探究されてきたのに対して、後者では「装置」という観点からそれらが探究されてきたためである。本論文では「媒介作用」と「延長作用」という二つの概念を考察の中心にすえて、それらの作用の場である「言語」と「装置」とを統一的な視点から考察し、そのことを通じて、ポスト・モダンの現代における主体のあり方の再検討を試みている。

本論文は四つの章から構成される。

第1章「メディウム論における媒介作用の問題——歴史と理論」では、マーシャル・マクルーハンをはじめとする複数のメディア論者の所説を取り上げながら、メディア装置の「媒介作用」および「延長作用」の諸相が考察される。まず、マクルーハン以降の理論的系譜を概観しながら、特定のメディアと特定の感覚器官との結びつき、及びその段階的な変容について述べられる。さらに、メディア発達の帰結として「身体の延長」および「時空の拡張」の諸相が分析される。また、メイロウィッツの状況論的アプローチを援用しながら、多種多様なメディアの発明が人々の時空感覚を拡張し、流動化させてきた経緯にも触れている。他の研究者の引用が多すぎるのがいくぶん気にかかるが、多くの著作を博搜した、たいへん密度の濃い導入部として、この章は高い評価に値する。

第2章「文化記号学における媒介作用の問題——人間と環境」では、ロラン・バルトと丸山圭三郎のディスコースを主要な題材としながら、文化記号学の視点から媒介作用・延長作用の問題を考察している。ここではとくに「言語（記号）」の働きが重視されている。言語活動が文化的秩序の硬直化を招来した、と主張するバルトや丸山の言語観＝文化観を前提とした上で、彼ら自身がそれぞれ独自の視角から「言語」の働きに対して異議申し立てを実践してきたことが論じられる。この章は、ロラン・バルトの記号論と丸山圭三郎の言語哲学の重なり合う接点を描き、なおかつ両思想家の気質の違いを浮き彫りにして、間然するところがない。なお、この章は、すでに映像学会の機関誌『映像学』に掲載されて高い評価を受けたものに加筆し、大幅な修正をほどこしたものである。

第3章「二つの『延長』概念をめぐる——メディウム論と文化記号学の言説比較」は、第1章および第2章での成果を分析し、メディウム論および文化記号学の言説の統合を試みている。「言語／装置」を対立概念として仮設し、その対によって文化記号学とメディウム論の理論的差異を明らかにし、それぞれの領域の橋渡しを試みている。文化記号学における

人間観の基本が「身体+言語」であるとすれば、メディア論における人間観の基本は「身体+諸装置」ということになる。さらに丸山圭三郎による〈生の円環運動〉理論に対する批判的読解を通じて、文化記号学およびメディア論の理論的限界を克服するためには、三重分節論（身体／言語／装置）という考え方が必要ではないかと問い掛けている。本章の末尾では、丸山圭三郎の唯言論的な人間論・文化論を批判的に再検討しつつ、彼が晩年に提起した〈生の円環運動〉理論を応用的に展開することによって、メディア論との架橋を探る試みがなされている。大胆なシエマを提示しながら議論が展開されるこの部分は、本論文の白眉であると言ってもいい。なかなか迫力のあるディスクールである。

第4章「人間と写真装置が遭遇するところへ」では、写真メディアの媒介作用を「言語」の媒介作用と対置しながら論述している。19世紀に、史上初の「テクノ画像」として誕生した写真メディアに関して、そのメディアとしての歴史的・理論的な位置づけがなされる。最後に、ロラン・バルトがその最晩年に書いた『明るい部屋』（1980）のもつメディア論としての重要性が論じられる。この書物は、記号学者を自認していたバルトが、自らの思想的遍歴の果てに、記号学との離別を語ろうとするものであった。他方、このテキストは記号学というよりもむしろメディア論として読みうるものであり、さらに、写真メディアの装置性に仮託して“言語圏からの離脱”を志向するものでもある。この『明るい部屋』についてのディスクールは、著者の修士論文の延長線上に位置づけられるものであり、目配りの行き届いた的確な考察である。なお、本章の後半は、日本記号学会機関誌『記号学研究』に掲載され、多くの記号学研究者から注目を浴びたものである。

本論文は、調査委員全員から「研究資料を博搜したレベルの高い論文である」との評価を受けた。「記号論とメディア論とのあいだには、比較を可能にするような同型性が存在するのか」という素朴な疑問に対して、申請者は、この2つのディシプリンをコミュニケーション論という視点から統合しようと試みた、と答えている。本論文の問題提起はきわめて意欲的な試みであり、申請者の研究資料と向き合っただけの博搜ぶりには驚異的なものがある。論文の末尾に付された11頁にわたる和洋の参考文献リストがそれを雄弁に物語っている。記号論とメディア論という2つの学問領域に橋を架けようとする本論文の試みは、その内容から見て、人間・環境学研究科（文化・地域環境学専攻、文化人類学講座）の基本理念に合致するものと判定しうる。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、2005年2月16日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。